

作文の部

優良賞

「生きる楽しさとあたたかい心」

涌谷第一小学校 六年 木村 朱里

私の母は介護施設で働いています。施設の中には階段や段差に、車いすが通りやすいようにななめ型になっている板を設置してあります。このことを高齢者や障害者のための「バリアフリー」といいます。安全で快適に過ごせるように置かれています。

母が働いている介護施設にうかがった時のことです。施設に入ってすぐに母は、車いすに乗ったおとしよりの方に近づき耳元で「お元氣ですか。」と話しかけていました。耳が聞こえにくいんだな、と不意に思っていると母は話しかけたお年よりの方の車いすをひき、奥の部屋に入っていたので私もついていくとそこには、母と一緒に働いている方々と数人のお年よりの方。かたを組みゆつくり歩いていました。それは、病院でも見た事のある「リハビリ」でした。一生けんめい歩い

ていると、リハビリをしていた一人のおばあさんが足をふらつかせながら私のもとへ来て、こう言いました。

「トイシまで一緒に下さい。」

と言われました。私はうなずくと、かたを組みゆつくり歩調を合わせて歩きました。

「私は特に不自由なことはありません。こうしてリハビリをしているだけでも楽しんだよ。」

と歩きながら言うおばあさんの言葉に心があたたかい気持ちになり

「はい、私もリハビリを手伝うのが楽しいです。」

といいました。さらにお年よりの方は、

「一人では行きたい所に行けないままだったけれど、今は行けるんだよ。」とおっしゃっていました。

私とは反対で不便な事がたくさんあるのにめげる事なく、前向きに話すおばあさんに生きる楽しさを教えてくれたようでした。